

公開・国際シンポジウム「礼拝像と奇跡 東西比較の試み」

■ コメント ■

ムスリム社会の聖遺物

——聖遺物とイスラーム

大稔 哲也

1. はじめに

中東社会史、歴史人類学の立場からコメントします。イスラームの立場というよりも「中東」の立場からとなります。なぜなら、エジプトのキリスト教徒であるコプト・キリスト教徒の事例を含めてお話するためです。なかでも私の主たる専門であるエジプトを中心にお話しさせていただきます。このエジプトには、私は1年のどこかの時点で必ず住むか通うということを過去21年間、1年も欠かさず行ってきました。どうしても良い話ですが、今年3月の訪問で、めでたく21年目となりました(2008年5月時点)。このような私がコメントに呼ばれたのは、おそらく学際的研究を意識されてのことかと拝察致します。また、本シンポジウムはタイトルに「東西比較の試み」とありますが、そのための鏡を一つ増やす試みでしょうか。そもそも、中東は東西のどちらに位置するのでしょうか。あるいは中間、さらには第三の極なのでしょうか。

いずれにせよ、これは難しいミッションだと思っています。というのも、多くの美術史研究者の方々にとって、イスラームや中東の聖遺物への関心は低いでありましょうし、私は「招かざる闖入者」なのかも知れません。

そして、コメントの仕方について付言しておきますと、ここでは「礼拝像」についてではなく、ムスリム(イスラーム教徒・イスラームの)社会に

おける「聖遺物」中心にお話します。彼らのための礼拝像やイコンにあたるものが欠如しているからです。また、写本絵画についてはコメントを差し控えます。これは他に専門家がおり、また写本絵画自体は、聖遺物そのものを反映するにせよ、聖遺物とはなりにくいからです。いずれにせよ、中東・イスラームという異なる視角からの事例提供と比較を心がけます。その上で、各発表へのコメントを最後に付け加えたいと存じます。

2. ムスリム社会における聖遺物

そもそも、「聖遺物」に相当するものがムスリムの文脈に存在するのでしょうか。アラビア語であえて挙げると、“*atbar* (単数形)” < “*âṭbâr* (複数形)” (直訳すると、“跡”、“痕跡”などの意)の語が“ナバウィー” < “ナバウィーヤ” (“預言者の”の意))と連結して、「アル=アサル・アン=ナバウィー」、「アル=アーサール・アン=ナバウィーヤ」となって使用される場合などが、それに最も近いニュアンスを含むと考えられます。意味するところは、「預言者ムハンマドの御物」です。

ムスリム社会における聖遺物とは、頭骨や遺体の一部などの遺骸だけでなく、マント、コーラン本などの物品も含めて考えるのが一般的です。ただし、それら聖遺物の範疇の変遷に関する歴史的な考察はまだなされていないと思います。ムスリム社会の聖遺物を聖遺物たらしめている系譜の源泉へと遡及すると、第一に預言者ムハンマドへ逢着しますが、その範例からさらに展開してモーセなど他の預言者や教友、著名なムスリムの聖者、シーア派では諸イマームなどへと遡及先が増加していったのではないのでしょうか。聖遺物は人々の崇敬を集め、モスク・墓廟などに奉納されて参詣の対象になりました。

ここからも想定されるように、預言者ムハンマドの御物というのは別格の扱いです。その遺物の数々は広く敬慕を集め、歴代カリフなどに受け継がれたのですが、特にマント、旗、毛髪、歯 (図1に写っているのは預言者ムハンマドの歯を納めるとされる聖櫃です)、足跡、履物、錫杖、剣、印章、ターバン、説教台、寝台、筆跡などがよく知られています。もともとアッ



図1 預言者ムハンマドの歯を納めるとされる聖櫃

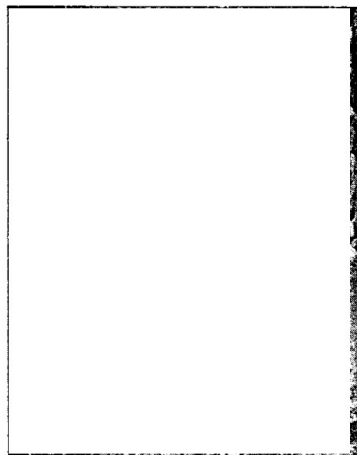


図2 預言者ムハンマドの足跡(カイロ)

バース朝バグダードのカリフ達がこうした聖遺物を所有していたのですが、モンゴルの侵入によって壊滅的打撃を受けた後、散逸してしまいます。しかし、14世紀エジプトのマムルーク朝カイロでは、こうした聖遺物がもう一度買い戻され、アル=アーサール・アン=ナビー・モスクが建立されました。このモスクの中には、現在、預言者ムハンマドの聖足跡だけが遺っています(図2)。この2つの足形の窪みは20センチに満たない大きさです。このとき奉納されていた他のものとしては、コーラン本や、クフルという目の隈取りをする棒などが挙げられていて、このモスクに対してワクフ(寄進財)が増やされて整備が進み、人々が大挙して参詣に訪れる名所となっていました。

聖足跡について言うと、これはシリア、エジプト、アルジェリア、インド、パキスタンにまで存在するとされ、広く崇敬を集めてきました。基本的には石塊などの上に窪みがあるという形状を持っています。さらに、ムハンマド以外の(イスラームの)預言者達についてみると、人類の祖アダムの足跡がセイロン島に、アブラハムがメッカ、モーセ(モーセもイエスもイスラームでは預言者と認められています)がダマスカス郊外、イエスとイドリースの

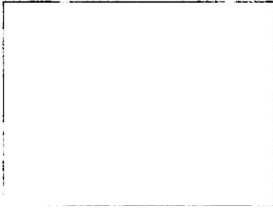


図3 イマーム・レザーの足跡
(イラン、ニーシャプール郊外のガ
ダムガー)

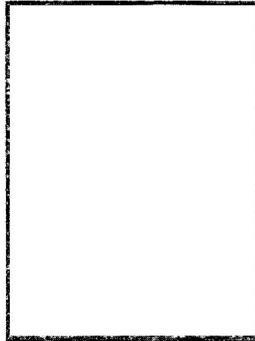


図4 イラン、ガダムガー、イマーム・レザー
の足跡廟脇の泉に掲げられている水筒の図版

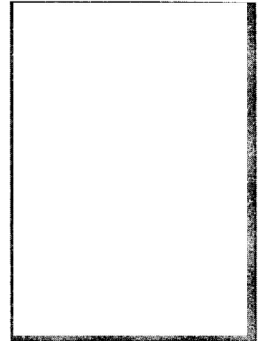


図5 預言者ムハンマドの鬚ま
たは毛髪(イスタンブル)

足跡がエルサレムにある、という具合です。また、図3はイラン(ニーシャプール郊外のガダムガー)で、預言者ムハンマドの血筋を引くシーア派のイマーム・レザーの足跡です。ちなみに、ここでは湧き出した御聖水を水筒に汲んで持ち帰ることができ、専用の足跡型付水筒も販売されています(図4)。

こちらは預言者ムハンマドの髭もしくは毛髪です(図5)。イスタンブルに現存するものですが、他に現存するとされる場所だけでもカイロ、シリアのダマスカス、エルサレム、パレスチナのアカ、ハイファ、サファド、ティベリヤ、そしてリビアのトリポリ、インドのパールなどを持ち上げることができます。

これらのムスリム聖遺物に共通しているのは、各地のムスリム社会に遍在しているということです。そして歴史的には預言者ムハンマドの血を引く人たちの頭骨や遺骨も非常に熱狂的に迎えられたという事実を指摘できます。その端的な例は、カイロのフセイン・モスクです。

ムスリム社会におけるいわゆる「聖者」とされる人たちも、このような聖遺物を保持することで、聖性を深めていたと思われます(これについては略す)。ですから、聖遺物をモノに限定せずに、預言者ムハンマドの血筋であったり、コーランの誦詠法やハディース(預言者ムハンマドにまつわる聖伝承)の保持であったり、あるいは「スーフィー」における「道」の継承、

このようなものまで含めて考えるべきかもしれません。いま申し上げたことの背景には、スーフィー・タリーカ（教団・流派）の組織化、あるいは宗教的施設の整備発展などが反映されていると思います。

なお、オスマン朝イスタンブールのトプカプ宮殿には、預言者ムハンマドのマント、旗、毛髪、歯、足跡等々が収納されており、かつてスルタンは、毎年ラマダーン月にこうした御物を儀礼訪問する慣行があったということです。ちなみに、預言者のマントにちなむアラブ詩『ブルダ』も非常に人気が高く、ムスリム諸社会に広まっています。

次に、インドの事例を加えておきたいのですが、『悪魔の詩』で日本でも良く知られるサルマン・ラシュデーに『預言者の髪の毛 (Prophet's Hair)』という短編があります。これを含む短編集の題は、このシンポジウムにも関連するかのよう「東西 East, West」とあります。ラシュデーはもともとムスリムです。この作品は実際に起こったという「預言者ムハンマドの髪の毛」盗難事件を題材としたもので、預言者ムハンマドの聖遺物への畏敬の念が呼び起こす尋常ならざる出来事の数々を扱っています。

また、ムガル王朝の歴代皇帝も聖遺物に並々ならぬ関心を示し、それを参拝していました。図版は預言者ムハンマドの足跡（図6）、そして履物をデザイン化したステッカーです（図7）。後者は貼付けたり護符にしたりと、様々な役割を果たします。さらに聖遺物の御開帳に際して、聖遺物にバラ水

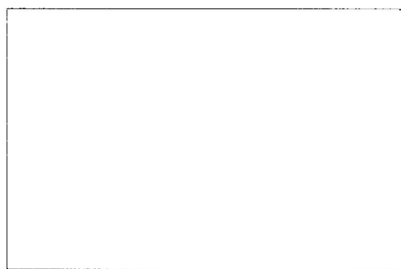
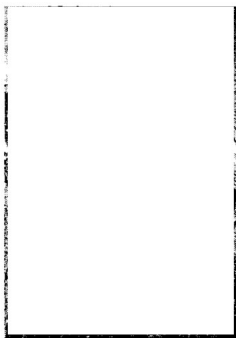


図6 (左) 預言者ムハンマドの足跡 (インド)

図7 (右) 聖履物ステッカー (インド)

を絞りかけて、そこから落ちてきた水分を皆に分ち与える事例も報告されています。

ちなみに、インドには足跡信仰の豊かな伝統があります。例えば、スリランカには、ムスリム、仏教徒、ヒンドゥー、キリスト教徒の聖地として知られている山頂（アダムズ・ピーク）があります。各信徒が預言者ムハンマド、ブッダ、ヴァイシュヌ神、アダムの足跡と解釈し、その考えのもとに崇敬していることとなります。

翻って、イスラームにおいては、こういった聖遺物への崇敬を促すような言及というものは、『クルアーン』や預言者ムハンマドの言行録である『ハディース』に見当たりません。それゆえ、常に学識者（ウラマー）からは批判の対象とされてきました。近代になってからはさらに批難が強まり、聖遺物は全体としては以前ほど敬われなくなってきつつあります。

3. ムスリムにおけるアイコンや礼拝像の欠落

『旧約聖書』の十戒の場面の冒頭には、「あなたは、私の他に何ものをも神としてはならない。あなたは自分のために、刻んだ像を造ってはならない。……どんな形をも造ってはならない。それにひれ伏してはならない。それに仕えてはならない。」（出エジプト記 20:3-5）という部分があります。この点にギヤスケル先生やヴォルフ先生が間接的には発表で触れられたと思います。聖書において、作像の禁止と受け取れる部分が十戒の冒頭に述べられているわけですが、クルアーンにはこうした作像禁止を直接示す証拠はありません。あえて言えば、イスラーム以前に崇拜された偶像というのは“父祖が勝手に作り出したものに過ぎず”（53:22）、“神に同等のものを配してはならない”（31:12）、などという程度です。また、唯一の神のみを信仰して偶像崇拜を否定することからも、ある程度論理的に導き出すことは可能でしょう。そして、その作像禁止については、クルアーンの次のレベル、すなわち預言者ムハンマドのハディースのレベルからは、人物を含む動物の像を描いたり彫ることは禁止されているという法判断が演繹されています。ただし、例えばイ

スラーム法について記した教科書的な著述の中に、作画の禁止が主題的に論じられることは通常ないようです。その意味では元々それほど重視されていなかったとも言えましょう。このことを同志社大学の中田考教授が概ね次のように述べておられます。預言者ムハンマドの肖像を描くことの禁止は無い。そこで禁止されているのは動物一般の像であり、それを拝むことである、と。

その証左の一つが、私も以前から気になっていたこれです（図8）。皆さん、この若者が誰だかおわかりいただけるでしょうか。これは若き日の預言者ムハンマドを描いた絵だと言われています。私が何か特殊なことをして手に入れたものではありません。イランの路上で売られていたものです。これは預言者ムハンマドがシリアとのキャラバン交易に従事していた頃、おそらく十代後半に出会ったキリスト教修道士の手による肖像画を写真化したものとされています。その意味で先ほどのギヤスケル先生の発表とも非常に関連するものと思われます。このコピーがポスターも含め、イランの公道で売られていたわけですから、これは見るからに複製することを前提にして売られているという印象すら受けます。

そもそも、「聖遺物」という研究上の問題設定、これ自体が多分にキリスト教的な関心の在り方を反映しているように思われます。というのは、ムスリムが考える「御物」についての研究はキリスト教世界に比べてはなはだ不

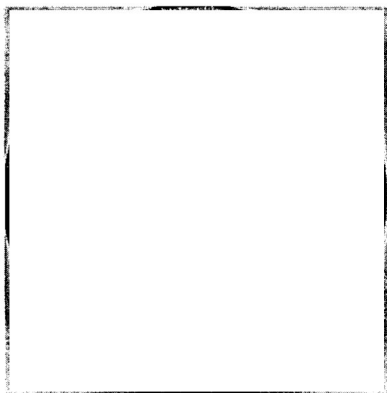


図8 預言者ムハンマドを描いたとされるバッジ

活発な現況にあります。例外としては、先ほど少し触れた預言者ムハンマドのマントを称える詩の研究があります。ですから今回、私は聖遺物というものを、むしろ新たな比較研究の上での分析概念として使用しております。ちなみに、日本の中東研究者で、ムスリムの聖遺物に論及しているのは私を含めて数名のみです。

ただし、そもそも中東のムスリ

ムというのは、その多くが歴史的にはキリスト教徒からの改宗者の子孫で占められています。あるいはキリスト教徒と同時代に共存しつつ暮らしてきた人々です。そういった交流の中で、ムスリムの社会の聖遺物崇敬がキリスト教徒から影響を受けてきたという可能性は十分にあると思います。

4. エジプトのコプト・キリスト教徒と聖遺物

第4に、エジプトのコプト・キリスト教徒と聖遺物との関係について補助線を引きたいと思います。というのは、ムスリムには聖像やイコンが無いといって話の芽を摘むのではなく、そこに同じ中東でも聖なる絵画、イコンなどの制作が非常に盛んなコプト・キリスト教徒をワン・クッションとして置くことで、違いをより際立たせようという狙いがあるからです。

エジプトのコプト・キリスト教徒というのは、7世紀のアラブによるエジプト征服後、現在に至るまで1350年以上に亘ってムスリムと共存してきました。現在も人口の約8パーセント、700万人以上はいると推定されます。彼らは451年のカルケドンの公会議でキリスト教内の異端の地位に追いやられ、ビザンツ帝国の迫害のもとで夥しい数の殉教者を出しました。それゆえ、ムスリム勢力がエジプトに到来した時、むしろこれを選択して受け容れたと考えるのが定説です。コプトとムスリムはお互いに非常に深い影響関係にあり続けました。

コプトはイコンや聖像というものを大変大切にしつつ社会を営んできました。例えば、これは『アッラーの男の奇蹟』と題された著作ですが(図9)、アッラーというのはアラビア語で「(唯一の)神」という意味です。キリスト教徒も信じているのは(唯一の)神ですのでアラビア語では「アッラー」を信じているということになります。事実、彼らの聖書アラビア語版には、神は「アッラー」と出ています。ですから、「アッラーの男」とは「神の男」という意味になり、ここで当該の人物は先代のコプト総主教キュリロス6世です。すでに亡くなっており、現在このキュリロス6世を聖人にしようとする熱心な運動が展開されています。彼のイメージの変遷についてはま

た後で触れます。現在、彼の奇蹟を集めた奇蹟集も盛んに出版されています。出版しているのは「キュリロスの子供達」を自称する人々です。ちなみに私はキュリロスが屋根裏に籠もっていた教会の向かいに住んでいました。彼は山上の庵まで日々登って修道していたのです。

なお、20年前の彼の生誕祭に私が昼間訪れた折には、2、3人しか居合わせませんでした。それが2007年頃になって壮麗な鐘楼が突如立ち上がりまして、おそらく何十万人というコプト・キリスト教徒が巡礼に訪れるという事態が生じています。さらに、こ

のキュリロス6世を讃えるべく、音楽メディアも盛んに利用されています。キュリロス6世を讃えるポップソングが作られ、このようなカセットテープの形式で販売されています(図10)。そして、こちらは彼が表紙を飾るメモ帳です(図11)。ここでは彼の姿は絵画化されてきています。

このように、イコンを巡る崇敬というのはコプトの間で非常に根強いものです。おそらくムスリムが行う以前から、コプトでは「聖人に祈願して執り成してもらう」という概念を展開していたと思われます。そして、ムスリムもいつの頃からか「聖者に執り成してもらう」という観念を持つようになります(ムハンマドによる執り成しはクルアーンから明白ですが)。ムスリムの有力者、例えばファーティマ朝のシャーワルという宰相は、キリスト教の教会を訪れることを好み、イコンに願掛けをしていたと言われます。その執り成しの結果、発現するのが奇蹟です。コプトにおける奇蹟には、ムスリムにおいても同じく奇蹟にあたるアラビア語の「カラーマ」(他にムウジザ、アジープ)という用語が使われます。その内容には、病気の治癒、死

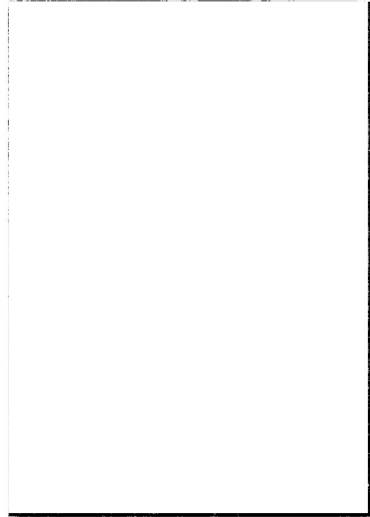


図9 キュリロス6世が表紙を飾る『アッラーの男の奇蹟』

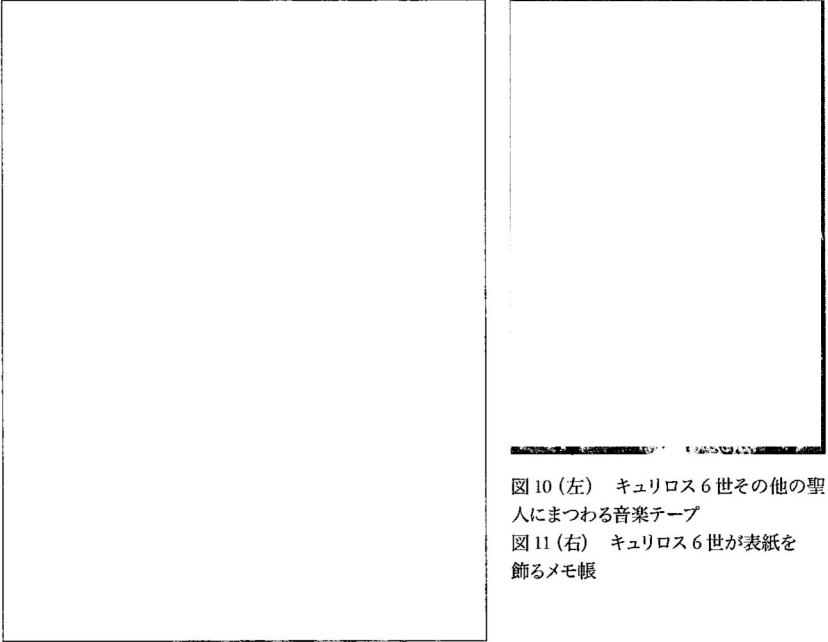


図 10 (左) キュリロス 6 世その他の聖人にまつわる音楽テープ

図 11 (右) キュリロス 6 世が表紙を飾るメモ帳

者の復活、ナイル川増水により渇水を免れる、憑き物や悪魔退治、水上歩行、瞬間移動、予見、動物譚、創出譚などがあります。加えて、イコンに関するものとしては、マリア様のイコンから光が溢出してきた、多数のイコンが落涙・発汗した、あるいは血を滴らした、聖ジョージによる護身、悪いムスリムへの懲罰、など多数あります。「カラーマ」と称される奇蹟、広くは奇蹟未満の美質を含みますが、これはイスラームの奇蹟譚と非常に似ています。ただし、イコンや聖遺物に関する部分は違いが際立ちます。ちなみに、イコンが行ったこうした奇蹟というものを、ムスリムの文脈で行うのは聖者の墓でしょうか。

このような世界ですので、聖母マリアがよく顕現しております。特に有名なのは 70 年代にカイロ郊外の教会上に現れた事件です。また、『聖女の 40 の奇蹟』（カイロ、1987 年刊）という本には、イスラエルとの戦争時に、エ

ジプト軍のコプト・キリスト教徒兵士がマリア様によって助けられた、という話も載っています。

またコプトの方は、多種の「宗教グッズ」とでも言うべきものを展開してきました。例えば、手帳、プロマイド、絵はがき、シール、キーホルダー、ステッカー、バッジ、書籍、置物、ノート、蜂蜜、ワイン、聖人の描いてあるペン、布、聖ジョージのTシャツ、といったようなパッケージ化された宗教グッズが続々と開発されてきました。カセット・テープに録音された(宗教的)音楽や儀礼も様々あります。今回、皆様の発表の中で音楽媒体の関連の仕方への言及は見られなかったのですが、パラレルな事情があれば紹介していただきたいと思います。

これに対して、ムスリムはおそらく何らかのブレーキを歴史的にかけてきた可能性があります。あるいは、宗教グッズを聖典など非図像・立像に限定する形で展開してきたとも言えましょう。それは同じエジプト社会でコプトとムスリムを比べればある程度明白です。しかし、現実には近年こうした複製文化を多用するような傾向がムスリム社会にもよく見られるようになってきました。第一に、聖典の一節などをもとにしたステッカーやキーホルダー、各種の置物などが、グローバルに大量生産されて、ムスリムの生活の隅々まで行き渡っている現実を指摘できます。さらに所謂イスラーム主義者によって、信仰の問答集や綱要をまとめた小冊子が大量に配られています。パッケージ化された宗教と言う点では、これらも含めて考えられるかも知れません。もう一つ多少様相を異にする例を挙げると、スーフィー教団があります。彼らは指導者や教団創始者のプロマイドやキーホルダー、ステッカー、お護りなど、様々なグッズを多数展開しています。(こちらはキリスト教徒のやり方により近いものです。シーア派は全般にこの路線に近い形態を採っています。)このように複製文化を多用するようなアプローチ、ポータブルな形態の宗教が激しく展開されています。

お時間があれば私がお聞きしたいのは、欧米キリスト教社会や日本において、複製の宗教グッズを展開している特定の存在や担い手があるか、ということです。その最新の局面と傾向についてもお伺いしたい。そして私に気が

なっていることは、エジプトの事例をみるとはっきりしますが、聖書にある作像禁止にもかかわらず、アイコンや聖像を通じた崇敬へと向かったキリスト教、一方でクルアーンに作像禁止がないにもかかわらず、アイコンや礼拝像に対する崇敬に向かわなかったイスラーム、こうしたねじれには一体何が作用しているのかという点です。ここにはさらにユダヤ教も加えて考察すべきでしょう。

5. 発表者へのコメント

ここでコメントだけ加えます。長岡先生のお話しになった霊験や習合の生じた空間、場についての議論を大変興味深く伺いました。これはヴォルフ先生のご発表にあった奇蹟の分類とも通じるように思いました。中国における道教と仏教、さらに神道的な世界とのつながりというのは、私のコメントで言うなら、コプト・キリスト教とイスラームの関係に比せられます。イスラームの到来以前、エジプトはキリスト教徒の国だったわけです。長岡先生のご発表の中で検討された、聖山や神仙の空間にエジプトのムスリムの文脈で相当するものは、聖者が多く眠り、祈願が叶うとされた広大な墓地区、「死者の街」だと思います。興味深いことに、コプトからイスラームという交替にあたって、その流れを肯定するような逸話がエジプトにも形成されていきます。例えば、ビザンツから派遣されたエジプト最後の支配者・宗教指導者であったキュロスという人物がいますが、彼の弟、もしくは甥がムスリムに改宗したという物語が遺っています。この種の伝承が他地域にも存在するのではなからうか。この辺りをご教示いただきたいと思います。

次にギヤスケル先生のご発表についてですが、近代から今日までの事例を含むご発表で大変刺激的でした。聖ベルナデットは日本でも大変人気が高く、その洞窟ごとレプリカを置くキリスト教ミッション・スクールすら日本にあると聞きます。それから絵画をもとにした写真にもオーセンティシティやアウラがあり、ミラクラスたりうるという指摘は、特に興味深く感じました。先ほどお見せしました預言者ムハンマドの姿も、まさに絵画をもとにし

た写真の複製の事例です。興味深いことに、イランの故ホメイニ師やレバノンのヒズブッラー（通称ヒズボラ）の指導者ナスルッラー師（通称ナスララ師）らの肖像画も絵画をもとにした写真を多く含みます。ここには聖なるものと政治との関わりという論点も垣間見えます。この点は長岡先生のご発表ともリンクするものと思われます。

先ほど述べました、コプトのキュリロス6世というのは、現在進行形で創られつつある聖人です。未だ列聖には至っておりません。ただ、彼のイメージが写真から絵画に移行しつつあるのか、注意深く見守らなければいけません。また、ギヤスケル先生のご発表の最後のスライドで、聖性の凝縮されたものである複製されたアイコンと国民国家の象徴である合衆国旗のミニチュアの複製とがパソコン上で同居していたのが印象的でした。

次に、加須屋先生のご発表からも、色々と考えさせられました。往生の予告というものはイスラームの文脈ですと、聖者の「カラーマ（奇蹟・美質）」に含まれるものです。これは未来を予知する能力と関連します。一方でこれはムスリムの学者たちから強く指弾されてきました。これは神の領域の侵犯に絡んでくるからです。そこで、お伺いしたいのは、この「予告された死」というものを問題視したり、それを阻むような信仰上の教理というものはなかったのか。あるいは、往生を遂げた者の肖像制作を妨げる論理はなかったのか、という点です。それ以外にもありますが、時間の関係から省かせていただきます。

ヴォルフ先生からも非常に多くのことを学ばせていただきました。特にアイコンや聖なるイメージのキリスト教社会における歴史的な側面というものを非常に意識させられました。加えて、イメージのそのフォルムと奇蹟的行動とのダイナミックな関係からも示唆を受けました。昨年12月のご発表の場に居合わせたかったと強く感じております。今回はあまり取り上げられておられなかった「執り成し」の概念も重要でしょう。この概念は先述のようにイスラームにとっても歴史的に重要なものです。そこで私がお伺いしたいのは、「アイコンによる執り成し」という概念がキリスト教徒一般に見られるのかどうか。（これはコプトにはあるのですが。）それがいつ頃どのような形で

生まれたのか。そもそも私自身がムスリムにおける執り成し概念の初源に非常に興味がありますので、これを良い機会に伺いたいと思います。どのような形で執り成しの概念がアイコンと結びついて展開していったのか。それはムスリムにとっても重要で、アッラーと信者を結ぶ存在、それがムスリムの聖者となるわけで、その執り成しという概念によって一神教の存立が曲がりなりにも確保される、という構図になっております。

最後にお願ひですが、ムスリムの聖遺物の「美術史的」研究というのはまだまだこれからだと思います。どなたか研究していただけないでしょうか。

ご清聴ありがとうございました。

■ 図版出典

図 1, 5 Asrâr al-Âthâr al-Nabawîya Bayrût 2007

図 2, 4 著者撮影

図 3 西村淳一氏撮影

図 6, 7 小牧幸代氏撮影

(おとし・てつや 東京大学大学院人文社会系研究科准教授)